



JA3AER

*** 初期のQSLカードとコールサインの変遷(その1) ***

JA3AER 荒川泰蔵

1. まえがき

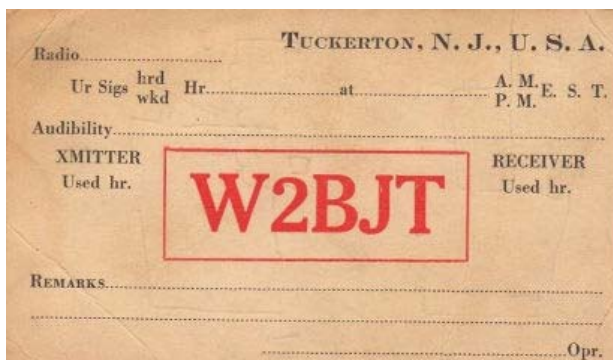
当誌(NDXA Report)3月号の「FT4TAがQRVしたTromelin島からの手紙」の記事で、1928年の「1BY」と「NU-2BFN」のQSLカードが説明なしで掲載されましたが、去る5月に大阪府立「花の文化園」で開催された公益財団法人 日本郵趣協会(JPS) 河内長野支部主催の「花と趣味の切手展」に、32リーフに整理して「アマチュア無線初期のQSLカード」と題した作品を展示したところ、一部の参観者に関心を持って頂きましたので、郵趣とは少し観点を变えて紹介したいと思います。

2. 骨董的なQSLカードの入手の経緯

米国駐在時の1980年代に、ニューヨークで開かれる切手展にしばしば足を運んでいました。そこでは日本のそれと同じように、切手商もブースを並べて郵趣品の販売をしていました。切手やFDCなどの他、古い絵葉書なども売られていましたので、それを物色している内に古いQSLカードを見つけ、30数枚をセットで買い求めました。値段は覚えていませんが、米国以外の切手は剥がされていて、郵趣的にはあまり価値のないものでした。

3. 入手した一連のQSLカードの概要

これらを調べてみるとW2BJT, Mr. Thomas Galbraith宛のQSLカードで、本人の未使用のQSLカードも2枚混じていました(写真1)。QSOは我々が生まれる以前の1927年から1929年にかけての2年足らずの期間のものですが、日本で初めて草間勘吉さんにJXAXというコールサイン(写真2)で免許が与えられたのが1927年9月ですから、日本のアマチュア無線の黎明期のものです。



(写真1)



(写真2)

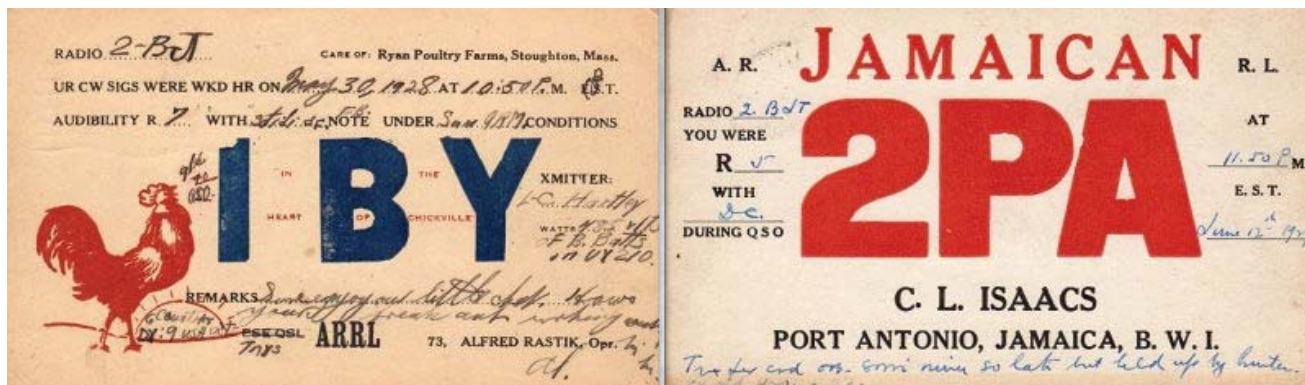
約半分が米国内のQSLカードで、残りがカナダ、メキシコ、キューバ、ジャマイカ、エクアドル、アルゼンチンと、ほとんどが北米と南米のものですが、それに英国のQSLカードとドイツのSWLカードが含まれています。この時代にこれらの国々でQRVがあったことは珍しいことではないのですが、この約2年間の僅か30枚ほどのQSLカードに、コールサインの変遷が見られることに興味を持ちました。

これは偶然なのか、Mr. Thomas Galbraithが意図的にこれらのQSLカードを選んでロットとして切手商/郵趣家に託したもののなのか分かりませんが、これらを遺品として遺族に残したとしても、いずれ捨てられる運命だったでしょうから、郵趣品として保存/継承され、歴史的な研究の資料にと、郵趣家に託したと考える不自然ではありません。そうだとすると90年近く生き延びたこれらのQSLカードを手にした私に、これを整理して公開する義務があるのではと考え、郵趣作品の形で公開させて頂いたものです。

4. QSLカードにあるコールサインの分類

これら一連のQSLカードのコールサインは次の3種類に大別できます。

1. 「数字 + 2または3文字」の形式で国籍表示がないもの(写真3)。



(写真3)

2. コールサインの前に国が識別できる2文字を付けたもの(写真4)。



(写真4)

3. コールサインの前に国際符字列による国籍表示を付けたもの(写真5)。



(写真5)

まず1番の「数字 + 2または3文字」のコールサインは米国商務省がアマチュア無線局に与えたもので、これが標準になって世界に広がっていきました。これには国籍表示がなく世界的には重複することも考えられたのか、アマチュア無線家が2番のように国が識別できる2文字の符号をコールサインの前に付けました。しかし、これは国際的な合意を得たものではなく、将来的な秩序が保たれない懸念から、3番のように、国際無線電信会議で決められた国際符字列による国籍表示を付けることになって今に続いています。(次号に続く)



JA3AER

*** 初期のQSLカードとコールサインの変遷(その2) ***

JA3AER 荒川泰蔵

1. 英国のオークションカタログにQSLカードを発見

主題からそれますが、去る6月7日に枚方市で開かれた、日本郵趣協会(JPS)の北大阪地域6支部合同例会に招かれて、「思えばラッキー人生」と題した40分余りの講演をさせて頂きました。各地で展示したアマチュア無線に関する切手作品を展示し、海外勤務時も国際的な趣味としての、アマチュア無線や切手蒐集を楽しんできた話をさせて頂きました(写真1)。



写真1

その合同例会で恒例の郵趣品のオークションがあり、入手した英国のオークションカタログに、アマチュア無線初期のQSLカードがロットで出品されているのに驚きました(写真2)。写真のG2DAのSWLカードは1926年3月1日となっていますが、ロットは主として1930年代の180枚余りのQSLカードで、推奨入札価格が360~400ポンドです。少々高いのですが、皆さんがDXのカード入手にかけておられる費用を考えると、1枚当たり400円では安いのかも知れません。

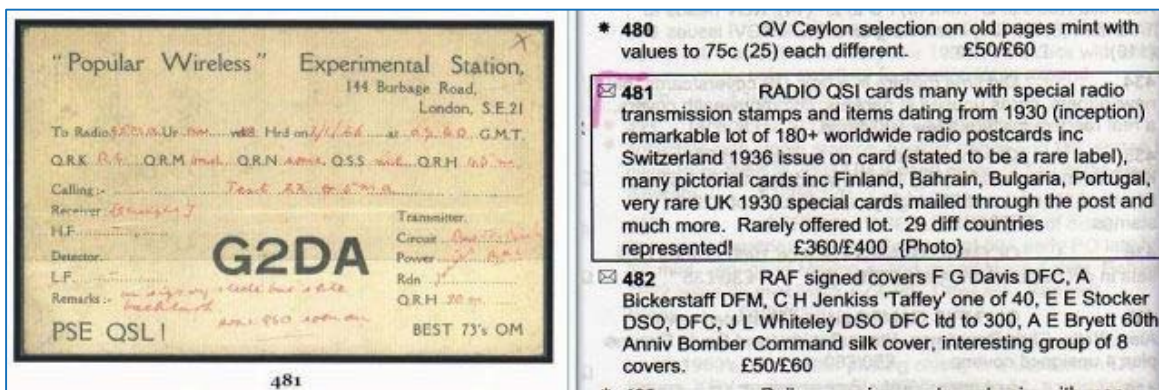


写真2

2. 「数字 + 2または3文字」の形式でコールサインに国籍表示がないQSLカード

先月号で3種類に分類した最初のグループですが、コールサインに国籍を示す国際符号のないものです。1923から1926年かけてのQSTで、ARRLがアルファベット1文字の国際符号を推奨しています(JJ1WTL本林さんの資料による)ので、これらの符号(例えば米国はU、カナダはC)があってもおかしくないのですが、なぜかそれが見当たりません。代わりに国名を目立つ色や大きな文字で分かりやすく表示しているものが多いようです。今回は少々郵趣的な見地より、これらのQSLカードがどのような経路で届けられたのかを探りながら、いくつかの事例を紹介させていただきます。

1. この「5JA」のQSLカード(写真3)は、官製はがきの裏に印刷されたもので、Mr. Richard HarrisのQTHであるDallas, Texasから、Tuckerton, New Jerseyの「2BJT」Mr. Thomas Galbraith宛に郵便で発送されています。QSOの日付が1928年6月27日で、郵便の消印が1928年7月7日になっていますから、QSOから10日後に投函していますが、遅れたことわりが書かれています。それにしても都市名のTuckerton だけで届いているのは、Galbraithさんが有名人だったのでしょうか。



写真3

2. この「6BZF」のQSLカード(写真4)も、官製はがきの裏に印刷されたものです。この時期であれば「u-6BZF」か「nu-6BZF」としてもよかったのですが、「U. S. A.」と国名が、コールサインと同じ字体、大きさ、色調で書かれています。Mr. H. D. HustonのQTHであるSherman, Californiaの近くのLos AngelesのArcade局からQSOの9日後の1928年6月1日に発送していて、これも相手からのQSLカードを受け取ってからの発送です。QSLカードには「2BJT」とありますが、郵便の宛名には「nu 2BJT」と書かれています。



写真4

3. この「9ARM」のQSLカード(写真5)は、私製はがきとして2¢の切手を貼って送られています。Mr. Mitchell Novickは自らを主任オペレーターと称していますが、クラブ局でもなさそうです。「2BJT」Mr. Thomas Galbraithへの宛名には、「Radio Corporation Station 2XD」気付けで送られていますから、彼は多分RCAに勤めていて、「2XD」はそのクラブ局か実験局だったのでしょう。Tuckertonには当時RCAの無線通信所があり、そのアンテナの高さは、パリのエッフェル塔に次ぐ世界で2番目に高い建造物だったそうです。



写真5

4. この「2PA」のQSLカード(写真6)は、私製はがきとしてMr. C. L. IsaacsのQTHである、ジャマイカのPort Antonioからダイレクトで送られています。残念ながら切手商の手を経ての入手ですので、切手が剥がされていて日付が確認できません。QSOは1927年6月12日とありますが、「Tnx for Crd om」と書かれ、遅れたことを詫言っていますので、「2BJT」Mr. Thomas GalbraithからのQSLカードを受け取ってから発送でかなり遅かったのでしょう。このQSLカードは今回のロットで最も古いもので、1927年のQSOが確認できるのはこの1枚だけです。

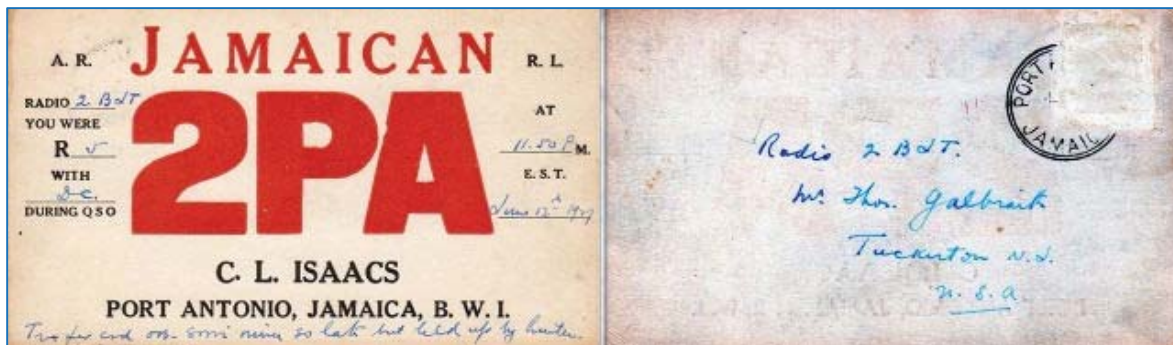


写真6

5. この「5WK」のQSLカード(写真7)は、私製はがきの裏に印刷されたもので英国からのものです。発送日は不明ですが、QSLカードに「TNX.QSL」とあるので、発送はかなり遅れてのことと思われる。英国側のQSLビューローは「VIA QSL, RSGB. 53 VICTORIA STREET, LONDON, S. W. 1.」と捺印されており、米国側のQSLビューローは「FORWARDED BY A. R. R. L. HARTFORD, CNN., U. S. A.」と捺印されていて、この時代にQSLビューローが機能していたことがわかります。相手のコールサインがW-2BJTとなっているのは、1929年1月1日から発効する国際識別符号を先取りしたものと思われる。

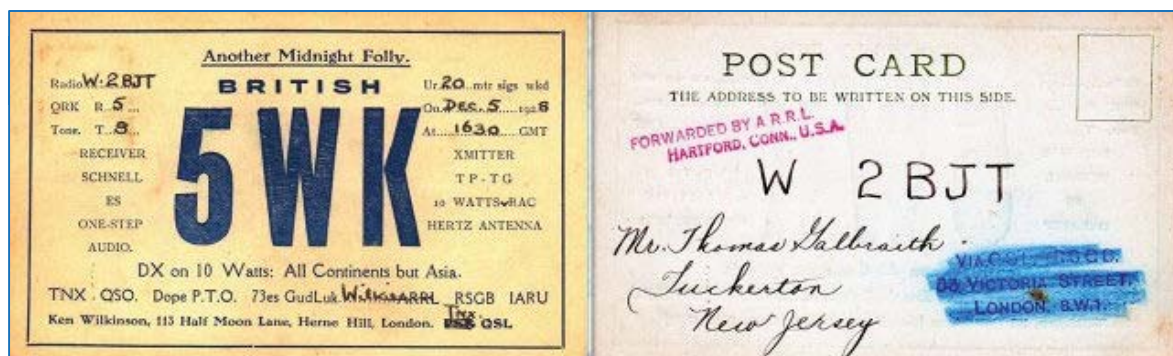


写真7

6. この「6HP」のQSLカード(写真8)も、私製はがきの裏に印刷されたものです。ロンドンの「6HP」DonことMr. H. D. Priceが、米国の「W2AEB」宛にQSLカードをまとめて送ったのか、「QSR BY W2AEB」と書かれ、米国の1¢切手を貼ってN.J.のGlen Ridgeから1929年1月12日付けの消印で「W2BJT」Mr. Thomas Galbraith宛に送られています。QSOが1928年12月27日ですから、英国から米国までの郵便は航空便だったのか、船便だったのかは微妙なところですが、

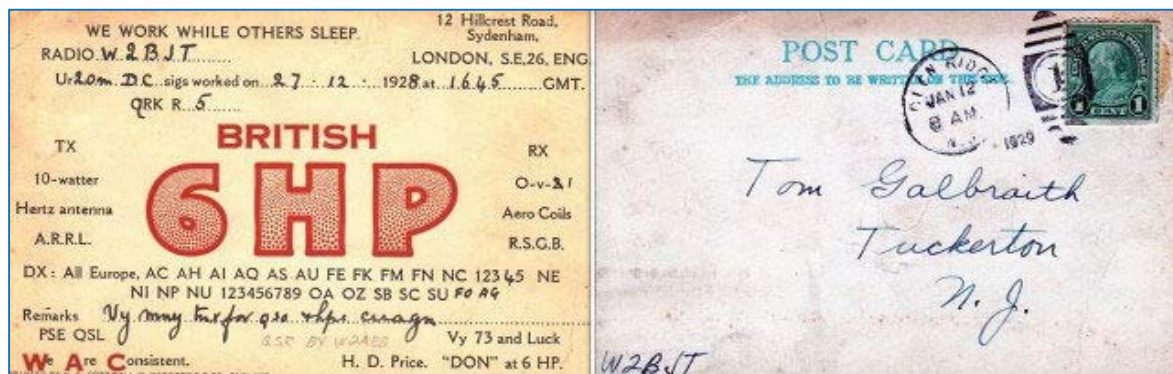


写真8

*** 初期のQSLカードとコールサインの変遷 (その3) ***
J3AER 荒川泰蔵

1. JJ1WTL本林さんからのメール

QSLカードやコールサインの歴史に造詣の深いJJ1WTL本林さんから、別件で問い合わせのメールを頂き、この連載記事のお話をさせて頂いたところ関連資料を送ってくれました。今回の「コールサインの前に国が識別できる2文字」は、本林さんの研究では「第2世代の国際中間符号」と名付けられていて、ARRLの機関紙であるQST誌1927年1月号に掲載されていたとのこと(写真1)。

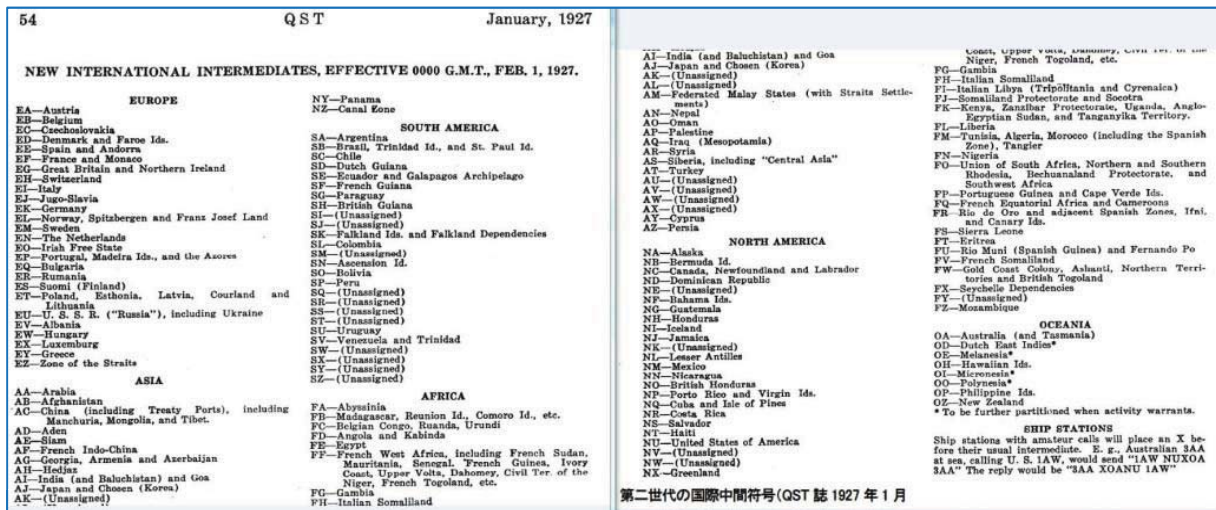


写真1

その別件と言うのは、大阪狭山ラジオクラブ(OSRC)が運用中の、狭山池築造1400年記念局8J3SP (SPはSayama Pondのイニシャル)について、いつまで運用するのか尋ねて来られたものです。どうして私に？と問い返したところ、私のホームページに「2015年4月28日、OSRCの記念特別局開局の相談に近畿総合通信局へ出かけました」との記述があったので、これだと思われたそうです。本林さんはCQ誌にもコールサインに関する記事を掲載された事がありますが、今回は8J - Station.info (<http://motobayashi.net/8j-station/index.html>)の一覧表を充実するためであったようです。いや恐れ入りました。何事も極めようと思えば、皆さんのDXCC追及のように、人並外れた執念と不断的努力が必要なのですね。ついでに、大阪狭山市の広報誌に掲載された記事(写真2)で、8J3SPを紹介させて下さい。



▲SAYAKAホール無線室
◀QSLカード

2016
14
人・ゆめ・ロマン
狭山池築造1400年
狭山池築造1400年記念アマチュア無線局が開局
世界に向けてPRを

6月20日、SAYAKAホール無線室で、狭山池築造1400年記念事業として「狭山池築造1400年記念アマチュア無線局(8J3SP)」が開局され、世界各局との交信が始まりました。

これは、大阪狭山ラジオクラブからのイベント企画提案を受けて実現したもので、交信者には、交信証明として狭山池をデザインしたQSLカード(交信証明書)が送られます。

問い合わせ 狭山池築造1400年記念事業実行委員会事務局(企画グループ内)

写真2

2. 「コールサインの前に国が識別できる2文字」を付けたQSLカード

先に3種類に分類した2番目のグループですが、前述のJJ1WTL本林さんは「第二世代の国際中間符号」としています(写真1参照)。先の記事で示した草間勘吉さんのQSLカードで、JXAXのコールサインの上に小文字で「aj」と書かれていたのも、この第二世代の国際中間符号でしたね。IARUコンテストでIARUのHQ局のコールがNU1AWとは憎いですね。

1. この「NU-2BFN」のQSLカード(写真3)は、1¢の官製はがきの裏に印刷されたもので、Mr. George V. MagnusonのQTHである Brooklyn, N. Y. から、Tuckerton, New Jerseyの「2BJT」Mr. Tom Galbraith宛に郵便で発送されています。QSO当日1928年4月13日の消印ですから、QSO後すぐに記入してポストに投函したのでしょうか。「2BJT」には「NU」が付けられていません。このはがきの宛名も、都市名のTuckerton だけでGalbraithさんに届いています。

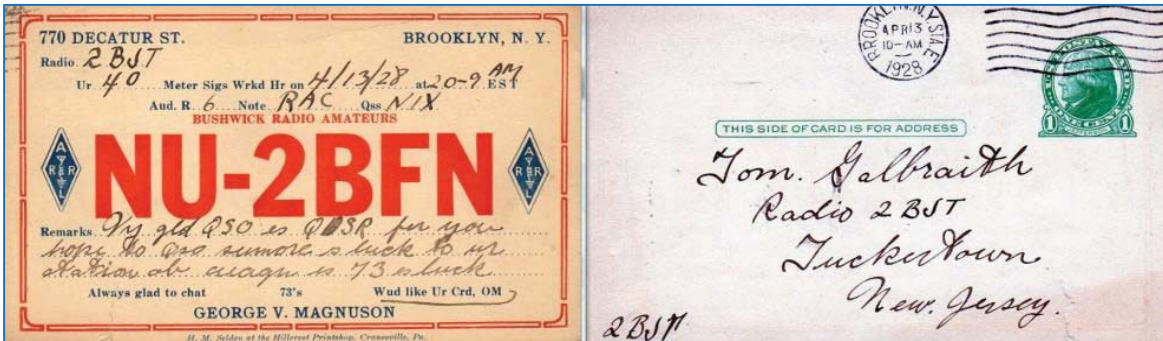


写真3

2. この「NU-4ACC」のQSLカード(写真4)も、1¢の官製はがきの裏に印刷されたもので、Mr. A. P. Kay, Jr.のQTHである Tampa Florida. から、Tuckerton, N. J.の Mr. Thomas Galbraith宛に郵便で発送されています。QSO翌日の1928年5月25日の消印ですから、QSO後すぐに出したのでしょうか。このQSLカードも相手局の「2BJT」には「NU」が付けられていません。このはがきの宛名も、Tuckerton だけでGalbraithさんに届いています。

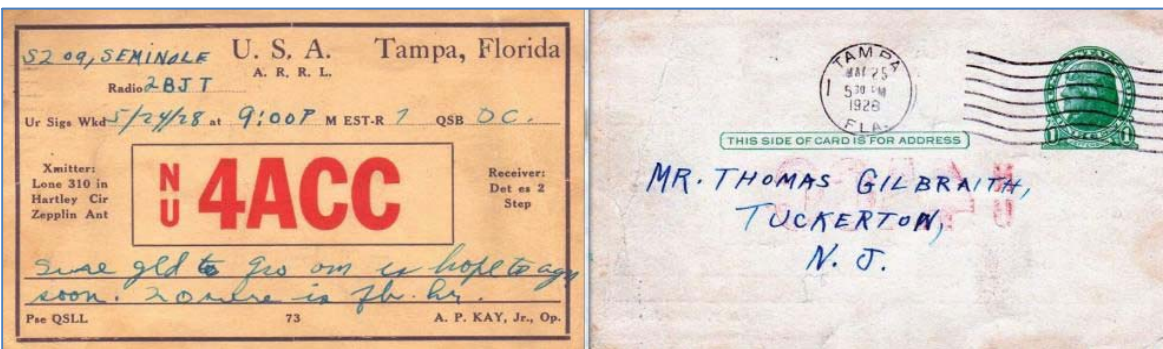


写真4

3. 次の「NU-5AFB」のQSLカード(写真5)も、官製はがきの裏に印刷されたものです。この時代の米国ではほとんどが官製はがきの裏に印刷していたものと思われます。Mr. Edward A. BlockのQTHである Dallas, Texasから、Tuckerton, N. J.の Mr. Thomas Galbraith宛に郵便で発送されていますが、c/o R. C. A. station WSC (WSCの意味は不明ですが)とありますから、GalbraithさんはR. C. A.に勤めておられたのかも知れません。1928年5月21日のQSOで、消印は1週間後の5月28日になっています。このQSLカードも相手局の「2BJT」には「NU」が付けられていません。

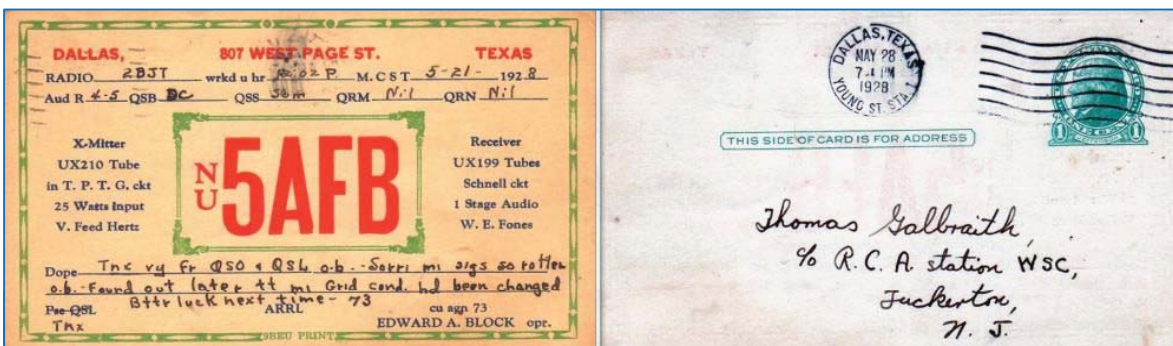


写真5

4. この「NC4GB」のQSLカード(写真6)は、カナダの官製はがきの裏に印刷されたものです。このQSLカードは2XD宛のSWLカードとして使用されています。宛名にはRadio Station 2XD, Radio Corporation of America (RCA)とありますので、2XDはRCAの無線局だったと思われます。アマチュア無線局か実験局かは不明ですが、GalbraithさんがRCAに勤めていて、このQSLカード(SWLカード)を扱ったのでしょうか。Mr. Bert Wilson のQTHである Regina, Sask. (Canada)の1927年10月20日付け標語入り消印が押されています。

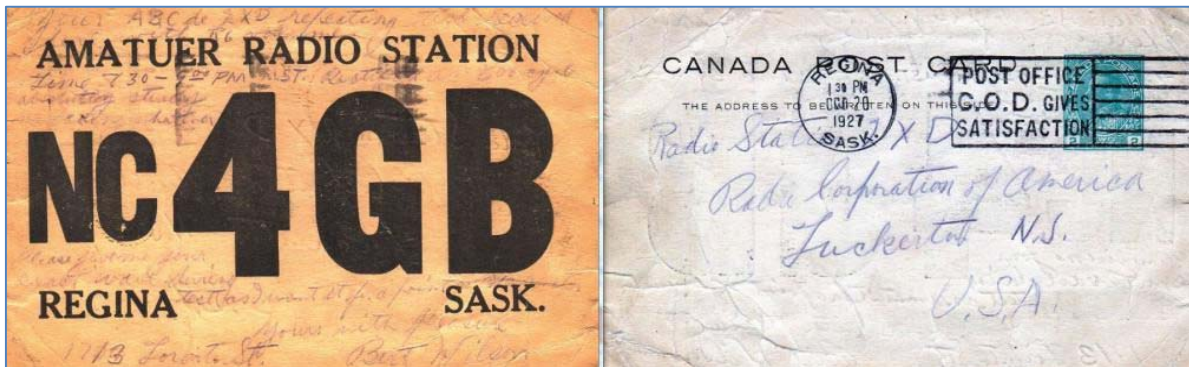


写真6

5. この「NM-9A」のQSLカード(写真7)は、私製はがきとして使われています。Mr. Carlos G. de CosioのQTHであるQueretaro, Mexicoから、Tuckerton, N. J.のMr. Thomas Galbraith宛に郵便で送られています。1928年12月23日のQSOですが、消印は-5 FEN 29になっています。「FEN」はスペイン語の略号と思われますが何月でしょうね。Pse QSLを横線で消してTnxとしているところから見ると、GalbraithさんらのQSLカードが届いてからですから2月かも知れません。残念ながら貼られていた切手は、私が入手した時点で既に切手商で剥がされてしまっていました。また、カードには「2BJT」としながら、前に「W」を書き添えていますから、Galbraithさんは既にW2BJTのコールサインで出していたか、W2BJTのQSLカードを使っていたものと思われます。



写真7

6. この「SE-2EA」のQSLカード(写真8)も、私製はがきとして使われています。Mr. Edison ArroyoのQTHであるGuayaquil, Ecuadorから、差し出されたものと思われます。このQSLカードは、GalbraithさんからのQSLカードを受け取って、QSOをしていないとの断りに、1928年6月26日に差しだされたものと思われます。残念ながら切手が剥がされていて全体は読み取れませんが、「JUN」だけは読み取れますので6月だけは間違いのないでしょう。

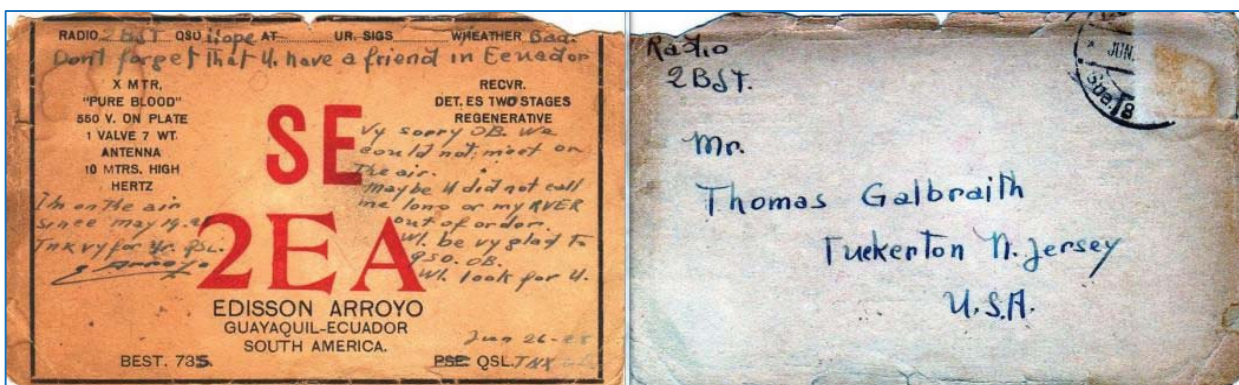


写真8



JA3AER

*** 初期のQSLカードとコールサインの変遷(その4) ***
JA3AER 荒川泰蔵

1. アマチュア無線のQSLカード用切手(Amateur Radio QSL Card Stamps)

今回は「コールサインの前に国際符字列による国籍表示」を付けたQSLカードの紹介で、このシリーズの最後の記事になりますが、7月号の(その2)で紹介した英国のオークションで約180枚の古いQSLカードのロットを落札し、このほど入手しましたので少し紹介したいと思います。手に入れて初めてわかったのですが、これは単なる古いQSLカードのコレクションではなく、各国のQSLビューローが転送料金を徴収するために発行した切手(ラベル)を貼ったQSLカードのコレクションでした。日本からのQSLカードも含まれており、皆さん懐かしいJARLの海外宛用のQSLカードの切手が貼ってあります(写真1)。



写真1

このようなQSLカード用切手は1930年代から1970年代まで30ヶ国以上で使われていたようですが、ここではスイス(HB9)と東ドイツ(DM)のQSLカードに貼られたQSLカード用切手を、一例としてご覧に入れます(写真2及び3)。いずれ整理をして、その歴史を調べた上で、改めてその全貌を紹介したいと思います。このようなQSLカード用切手もコレクションの対象になるのは初めて知りました。でも郵便切手を対象とした郵趣とは一線を画すものかも知れません。

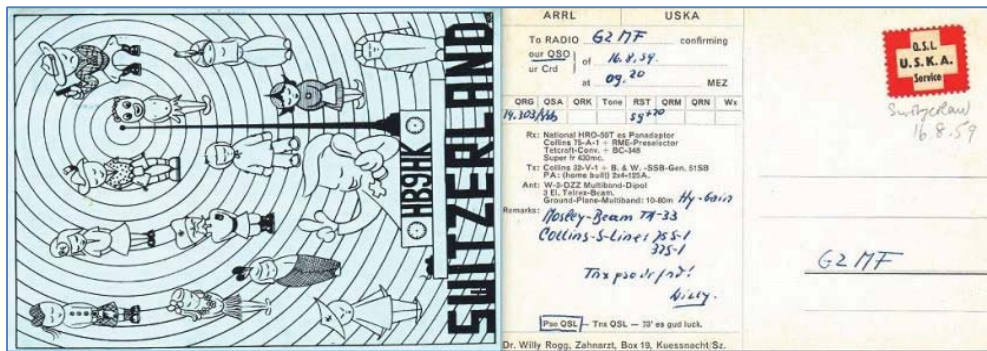


写真2



写真3

2. 「コールサインの前に国際符字列による国籍表示」を付けたQSLカード

これは先に3種類に分類した最後のグループですが、これが現在まで続いているコールサインの形です。頭初アマチュア無線は軽く見られていたのかも知れませんが、比較的短期間に長距離通信による外国との交信が日常的になり、最終的に一般の無線局と同列の国際符字列が使われるようになったのは興味深いところです。

1. この「W1MO」のQSLカード(写真4)は、私製はがきとして1¢の切手を貼って、Mr. Harry C. MerryのQTHであるProvidence, R. I. からTuckerton, New Jerseyの「W2BJT」 Mr. Tom Galbraith宛に郵便で送られています。QSOが1928年12月9日で、消印が12月10日と翌日ですから、QSO後すぐに記入してポストに投函したのでしょう。このはがきの宛名も、都市名のTuckerton だけでGalbraithさんに届いています。



写真4

2. この「W6CHY」のQSLカード(写真5)は、私製はがきとして2¢の切手を貼って、Mr. Gun A BakerのQTHである Santa Monica, CaliforniaからTuckerton, N. J.のMr. Thomas Galbraith宛に郵便で送られています。QSOの日付が1928年1月7日と書かれ、あとで誰かが9を付け足していますが、消印は1929年1月9日ですから1929年が正しいでしょう。これには移動局「W6CBA」のコールサインも同時に印刷されています。移動局と固定局のコールサインが別だったのでしょうか。

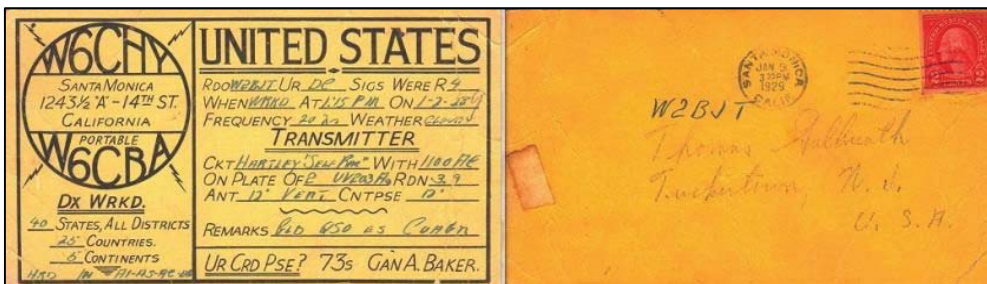


写真5

3. 次の「W-9FTY」のQSLカード(写真6)も、私製はがきとして1¢の切手を貼って、Mr. Leo BornのQTHであるTopeka, KansasからTuckerton, N. J.のMr. Thomas Galbraith宛に郵便で送られています。QSOが1928年11月1日で、消印は11月8日ですから1週間後の発送ですが、相手局のコールサインは「2BJT」と「W」がついておらず、自分のコールサインは「W」と「9FTY」の間にハイフオン「-」を入れていいますから、この11月はコールサインの切り替わる微妙な時期だったのかも知れませんが、宛名面には左下にW2BJTと書き加えているのも興味深いところです。

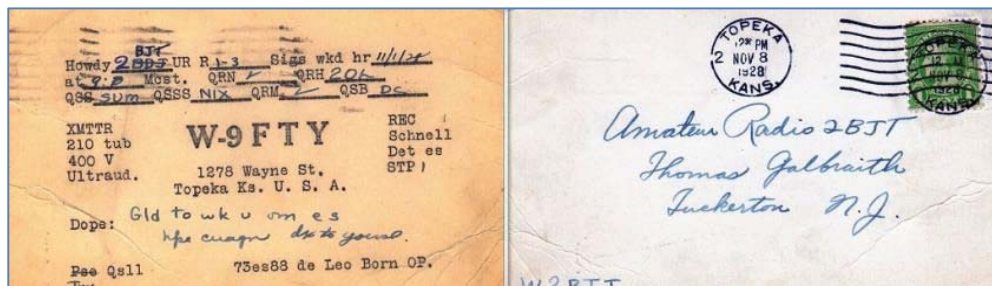


写真6

4. この「VE3ET」のQSLカード(写真7)は、私製はがきとしてカナダの切手を貼って、Mr. G. V. LawrenceのQTHであるカナダのParry Sound, Ontarioから米国のTuckerton, N. J.のMr. Galbraith宛に郵便で送られていますが、国際郵便でありながら宛名に国名は記されていません。残念ながらカナダの切手は剥ぎ取られていますが、幸い消印は明瞭に残っていて1929年1月2日と読み取れます。QSOが1928年12月12日ですから、3週間後に投函されたこととなります。

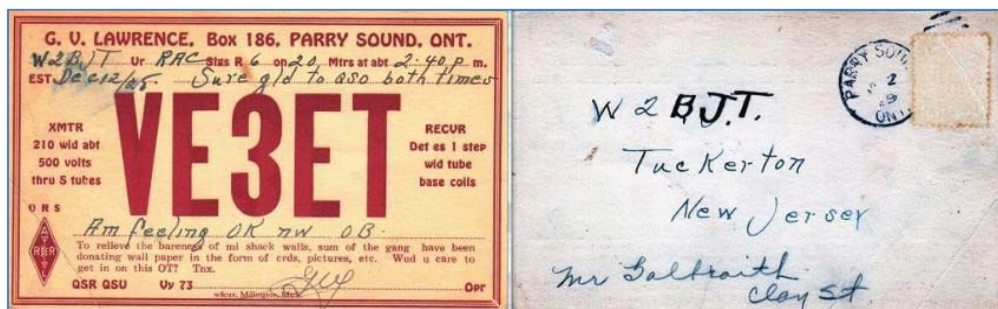


写真7

5. この「G5BY」のQSLカード(写真8)は、片面印刷ですが二つ折りのカードです。右下には日本と最初にQSOした英国の局である旨の記載があります。Mr. H. L. O'HeffernanのQTHであるCroydon, Surrey, Englandから1928年11月16日に封筒に入れて、Tuckerton, N. J.のMr. Thomas Galbraith宛に郵便で送られています。封筒には「G5BY」のコールサインではなく「EG-5BY」と印刷されています(写真は省略します)。1928年11月9日のQSOですので、1週間後に投函されています。



写真8

6. この「G6LL」のQSLカード(写真9)は、私製はがきに印刷され、Mr. J. W. MathewsがLondonからRSGBとARRLのQSLビューロー経由でTuckerton, N. J.のMr. Thomas Galbraith宛に送られています。QSOは1928年12月26日ですが、QSLビューローでは取り扱った日付を入れませんから差し出された日は不明です。



写真9

以上、短期(4回)の連載でアマチュア無線初期のQSLカードを、郵趣の視点を交えてご覧いただきましたが、この2年間(1927 - 1929)の急激なコールサインの変化を示す一つのエビデンスとして、貴重な資料になるのではないかと思います。ご愛読ありがとうございました。